

教科書文庫
4
815
41-1931
2000022309

著 憲 田 千

中等國文典

初學年用

京 東
院 書 文 右

41852

教科書文庫

4
815
41-1931
20000 22309

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



日四月二十年六和昭
用科文漢語國校學中
濟定檢省部文
日六十月十年八和昭
用科語國校學業實

教科書文庫
4
815
41-1931
2000022309

資 料 室

375.9
Se14

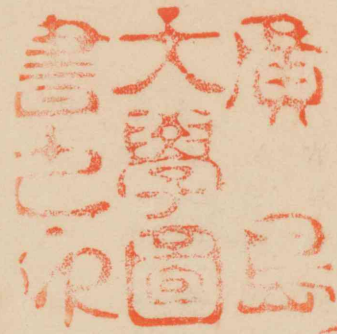
中等國文典

千 田 憲 著

初學年用

東京右文書院

広島大学図書
2000022309

中等國文典 初學年用 目次

第一章 總 說	一
第二章 語の性質	四
第一節 名 詞	四
第二節 數 詞	五
第三節 代名詞	五
第四節 動 詞	八
第五節 形容詞	九
第六節 副 詞	一〇
第七節 接續詞	一二
第八節 感動詞	一三

目次

一

第九節 助動詞……………一四

第十節 助詞……………一七

第三章 語の活用……………二〇

第一節 文語動詞……………二〇

一 活用……………二〇

二 活用の名稱……………二二

三 活用の種類……………二五

四 形容動詞……………三五

第二節 口語動詞……………三七

第三節 形容詞……………四三

活用……………四三

第四節 音便……………四六

第五節 文語助動詞の種類・接續及び活用……………四九

第六節 口語助動詞の種類・接續及び活用……………七二

第四章 助詞……………八四

第一節 體言に續く助詞……………八四

第二節 動詞・形容詞・助動詞に續く助詞……………八七

第三節 種々の語に續く助詞……………九三

第五章 語の構成と品詞の轉成……………一〇一

第六章 文の成分……………一〇五

附録

表

第一表 代名詞一覽表

第二表 動詞活用一覽表

第三表 助動詞活用一覽表
 第四表 文語、動詞助動詞連續一覽表
 第五表 口語、動詞助動詞連續一覽表

中等國文典 初學年用 目次終



中等國文典

初學年用

第一章 總說

櫻。

咲く。

犬。

走る。

右の四つの語は、皆それぞれ或意味を表してゐて、これ以上に分ける事の出来ない言葉の單位である。このやうに、或意味を表してゐる言葉の單位を單語たんごといふ。

櫻咲く。

犬走る。

右の二例は、いづれも二つの單語が集まつて、一つの纏まつた思

單語

文

口文語

文法

文語法

口語法

想を表したものである。このやうに、幾つかの單語が集まつて、一つの纏まつた思想を表したものを文といふ。

- 一 櫻咲きて樂しき春となりぬ。(單語の數八つ)
- 二 櫻が咲いて樂しい春になりました。(單語の數十)

文には右の一の例のやうに、主として在來の記録の上で用ゐられた文體と、二の例のやうに、日常の談話のままに書き表すのに用ゐられる文體との二種がある。一を文語といひ二を口語といふ。言葉は多くの人々に共通に用ゐられるものであるから、そこに一定の法則が無ければ、これを用ゐてお互がその思想を正確に傳へたり、又は理解したりする事が出来ない。この法則を文法といふ。文語に存する法則を文語文法(略して文語法)、口語に存する法則を口語文法(略して口語法)といふ。

單語をその意味形、職能の上から次の十種に分ける。そしてそ

品詞の分類

の各を品詞といふ。

- 一 名詞
- 二 數詞
- 三 代名詞
- 四 動詞
- 五 形容詞
- 六 副詞
- 七 接續詞
- 八 感動詞
- 九 助動詞
- 一〇 助詞

練習

次の文を單語に分けたら幾つになるか。

イ 鳥鳴く。

ロ 美しき花咲く。

ハ 日暮れ月東山の頂に出づ。

ニ 子供が花を折る。

ホ 僕は毎朝七時に學校へ行く。

ヘ 東京の兄から手紙が届いた。

ト 松島宮島天の橋立を日本の三景といひます。

チ 僕は四月から中學生になりました。

第二章 語の性質

第一節 名詞

文語

櫻咲く。

山には木多し。

秀吉朝鮮をうつ。

口語

これは歴史の本です。

瓢箪から駒が出る。

名詞

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の名を表す語を名詞といふ。

固有名詞
普通名詞

秀吉朝鮮のやうに、一つのきまつた事物に限つて用ゐられる名詞を固有名詞といひ、山木などのやうに、同じ種類の事物に廣く通じて用ゐられる名詞を普通名詞といふ。

第二節 數詞

文語

一寸の蟲にも五分の魂。

寺古りて梅二三本、月あら

ば更によし。

千里の道も一步より始ま

る。

口語

第一號から第三十號までが合格です。

一月ばかり雨が降らない。

數詞

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の數量又は順序を表す語を數詞といふ。

第三節 代名詞

文語

口語

我は彼がいづこの誰なるかを知らず。

あの品はどこにも無い。百姓は山のあつちへ歸つて行きます。

右の例の傍線を施した語のやうに、名詞の代りに用ゐられる語を代名詞といふ。

代名詞
人代名詞
指示代名詞

我彼などのやうに、人の名の代りに用ゐられる代名詞を人代名詞といひ、これどこあつちなどのやうに、事物場所方向の名の代りに用ゐられる代名詞を指示代名詞といふ。

人代名詞の中、我わたくしのやうに自己を呼ぶものを自稱第一人称、汝あなたのやうに相手を呼ぶものを對稱第二人称、彼このかたのやうに第三者を呼ぶものを他稱第三人稱といふ。

他稱には、その遠近によつて、近稱中稱遠稱などの區別があり、又誰どなたのやうに、定まつてゐないものを呼ぶのを不定稱といふ。

指示代名詞にも、その指示する場合によつて近稱中稱遠稱不定稱の區別がある。

代名詞は文語と口語とによつて、趣の異なるものがある。附録の第一表を見なさい。

名詞數詞代名詞は事物の本體を表す語であるから、これを體言といふ。

練習

次の文中の名詞數詞代名詞を指摘しなさい。

- イ 東京は日本の首府なり。
- ロ 菜の花や月は東に日は西に。
- ハ 熱田の社を左に見て春風に吹かれゆけば、名古屋の城は、まがはぬ影を見せたり。
- ニ 私の一部屋は東の六疊にて、文雄君と二人机をならべをり候。
- ホ この人かの花を詠じて、花と人と千古に芳し。

體言

へ二時十分今まで鯨に引かれてゐたニコライ丸は、愈反對に鯨を引きよせることとなつた。
トそれは僕の帽子だ。君がまちがへたのだらう。

第四節 動詞

文語

鳥空を飛ぶ。

東に日本あり、西に英國あり。

僕は朝早く起きる。

口語

玄關前に櫻の大木がある。

動詞

右の傍線を施した語のやうに、事物の動作又は存在を表した語を動詞といふ。

練習

次の文中の動詞を指摘しなさい。

イ 風吹きて、花雪の如く散る。

ロ 笑ふ門には福來る。

ハ 松風清き夕浪に、月もよせくる須磨の浦、關屋は跡も残らねど、人の心やとまるらむ。

ニ 鳥が一羽、西空を慕ふやうに飛んで行つた。僕はしばしその行方を見守つてゐたが、その影が森の方に消えると、しみじみと迫る寒さを思ひだして、田の畦を歩んだ。

第五節 形容詞

文語

松青く、砂白く、風景美しき所なり。

梅檀は二葉より芳し。

右の例の傍線を施した語のやうに、事物の性質や状態などを表

口語

美しい花が谷間に咲いてゐる。
夏は暑く冬は寒い。

形容詞
用言

す語を形容詞といふ。

動詞、形容詞は事物の作用を表す語であるから、これを用言といふ。

練習

次の文中の形容詞を指摘しなさい。

イ 高き山の麓に廣き野見ゆ。

ロ 風はますく、烈しく、雨はいよいよ強し。

ハ 遠き慮なきものは必ず近き憂あり。

ニ つめたい夜氣がしつとりと肌にふれて、あたりは寂しいほど静かであつた。

ホ 鐘の音が止んで、鶏の聲がする。何だか鶏の聲まで楽しく心地よく聞える。まだほの暗い。

第六節 副詞

副詞
動詞

副詞

文語

一 風そよそよと吹く。

二 雨いよいよ強く、雷鳴まします。烈し。

口語

空が俄に曇る。

この花は大層美しい。

右の例の中で一のそよそよとは動詞吹くの意味を限定し、俄には動詞曇るの意味を限定してゐる。二のいよいよは形容詞強くの意味を限定し、ましますは形容詞烈しの意味を限定し、大層は形容詞美しいの意味を限定してゐる。かやうに、動詞形容詞(即ち用言)の意味を限定する語を副詞といふ。

副詞は又、他の副詞の上に添うてその意味を限定する事もある。

文語

更に一層つとめよ。
やや暫く待つ。

口語

大變上手に書きました。

第七節 接續詞

文語

書を讀み而して字を習ふ。
文を學び或は武を講ず。
見渡す限り山又山なり。

口語

國語英語及び數學の三科目に
力を注いでゐる。

右の例の傍線を施した語のやうに、語句や文章を接續する語を

接續詞といふ。

練習

一次の文中の副詞、接續詞を指摘しなさい。

イ 燈火かすかに見ゆ。

ロ 臺灣は氣溫高し、故に雪を見ず。

ハ 雨ますます烈しく、殆ど進退に窮せり。

感動詞

第八節 感動詞

文語

あら面白や。

ああ悲しいかな。

あはや味方の陣危きぞ。

口語

おや珍しいこと。

ええ口惜しい。

いや知りません。

右の例の傍線を施した語のやうに、感動の意を表す語を感動詞といふ。

練習

一次の文中の感動詞を指摘しなさい。

イ あつばれ勇ましき武者ぶりかな。

ロ すは火事よと騒ぎぬ。

ハ やよ待てしばし。

ニ はい承知しました。

ホ そら風が吹いて來たぞ。

ニ 知つてゐる感動詞を使つて短文を作りなさい。

第九節 助動詞

文語

花はすでに散りたり。

歳月人を待たず。

口語

本がまだ届かない。

人からよく言はれる。

助動詞

明日は雨となるべし。

明日は早く起きよう。

右の例の傍線を施した語のやうに、主として動詞の下についてその意味を助ける語を助動詞といふ。

助動詞の中には、體言や形容詞などに添ふものもある。

文語

軍人は國家の干城たり。

太郎の成績は常に第一位なり。

なり。

學校中の雄辯家は彼なり。

性質はよきなり。

口語

あの人は音楽家だ。

……第一位です。

……彼です。

助動詞の中には、のがの下に添ふものもある。

落花雪のごとし。

水の流るるがごとし。

助動詞は又他の助動詞と重ねて用ゐられる事も多い。

文語

日本外史を讀ましめられたり。
楠木正成は忠節なる人なりき。

口語

母校の運動會に誘はれた。

練習

次の文中の助動詞を指摘しなさい。

イ昔ギリシヤにスパルタといふ國ありき。國民愛國の精神燃ゆるが如く、武勇のほまれ今なほ高し。

ロめくら蛇におぢず。

ハ瞬くひまに朱盆の如き日はさし昇りぬ。

ニ生徒は學則を守るべし。

ホよき習慣を養はしむる必要あるなり。

ヘ熱した汗の點滴が、冷たい線になつて胸を流れる。

ト先生もこの會に御出席くださるさうだ。

第十節 助詞

文語

太郎は本を讀む。

松は幾年経れども、緑の色をかへず。

口語

花が咲き、鳥が鳴く。

運動すれば、丈夫にならう。

助詞

右の例の傍線を施した語のやうに、種々の語について、その意味を助け又は他の語との關係を表す語を助詞といふ。

助詞はその數が多い。今用法の上から三類にわけて、その主なものを次に擧げる。

一體言に續く助詞

○ がのにをへとよりからまで。

二 用言又は助動詞に續く助詞

ばとともどもにまがててつながらばやなむな。
 三種々の語に續く助詞

はもぞなむこそやかばかりのみだにさへすらかなよかし
 練習

一次の文中の助詞を指摘しなさい。

イ木の葉散りみだる。

ロ好きこそ物の上手なれ。

ハ麥の緑ますます濃く、菜の花も咲きそめ、田の畔の野苺も簇々と芽を吐きぬ。

ニ石の上に苔青う松の落葉かな

ホ雨が降ると寒くなる。

へ殊に或日の夕方近く、高山町を見下す高い城山公園を散歩した時の事は、なかなか忘れられない。

ト汽車の窓はるかに北にふるさとの山見えくれば襟を正すも。

二次の文について、各品詞を指摘しなさい。

イそれより綏靖・安寧・二天皇の御陵を拜みて長谷の方へと志す。

ロ釜山の浦の秋更けて、空もしくるる夕まぐれ、波路はるかに帆をあけて、汝とはとはに別るべし。

ハそれとなく郷里のことなど語出でて秋の夜に焼く餅の匂かな。

ニ春の日はさのふの如く暮れて、折折の風に誘はれる花吹雪が、臺所の

腰障子の破れから飛びこんで、手桶の中に浮ぶ。

ホ田舎の朝の空気は全くいい。その空気の中で毎朝深呼吸をすると、

肺の底まで匂ふかと思ふ。

へ青梅が三つ、つぶらになつてゐるのが目だつ。その他にもなつてゐる

であらうが、青葉に隠れて見えぬ。

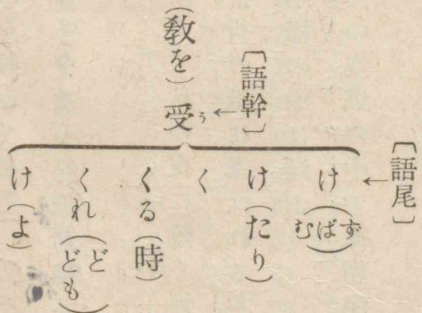
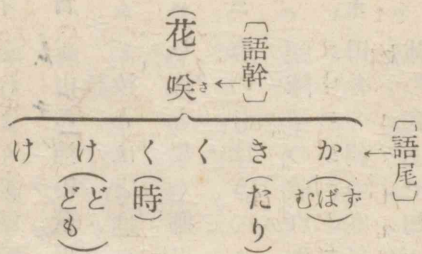
ト毎年夏になつて、そろそろ夕方の風が戀しいころになると、物置にし

まつてある竹製の涼み臺が、中庭へ持出される。

第三章 語の活用

第一節 文語動詞

一 活用



右の例のやうに、動詞はその用ゐる方によつて、いろいろに語形が

語幹
語尾
活用

變化する。そこで動詞を變化する部分と、變化しない部分とに分けてみる事が出来る。その變化しない部分を語幹といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。動詞の活用は、五十音圖の一行内に於て六種に行はれるのが原則である。

練習

次の文中の動詞を指摘して、語幹と語尾とに分けなさい。

- イ 歌へども心慰まず。
- ロ 暑を海濱に避けたり。
- ハ 敝衣を着くれども恥ぢず。
- ニ 日落ちぬ。石垣に腰かけ足を垂れつつ釣る。
- ホ 世の進むに従ひて、分業行はる。
- ヘ 咲きつづく葦たんぼぼをなつかしみ、もとの道をまたもどりき。
- ト 里人はこれをいひ傳へ、名和が約束の松と呼びて、今に話傳へたり。

二 活用形の名稱

動詞の語尾は活用して六種となり、その各に特殊の用法がある。
第一活用形

咲か（むばす） 受け（むばす）

この形は多くずばむなどに連つて、動作のまだ成立せぬ意味を表す形であるから、これを未然形といふ。

第二活用形

咲き（たる） 受け（たり）

この形は多く活用する語に言ひつづける形であるから、これを連用形といふ。

第三活用形

咲く 受く

終止形

この形は多く文の意味を言ひきる形であるから、これを終止形といふ。

第四活用形

咲く（時） 受くる（時）

この形は多く體言に言ひつづける形であるから、これを連體形といふ。

第五活用形

咲け（ども） 受くれ（ども）

この形は多くどもなどに連つて、動作の既に成立した意味を表す形であるから、これを已然形といふ。

第六活用形

咲け 受け（よ）

命令形

この形は命令の意味を表す形であるから、これを命令形といふ。

已然形

連體形

練習

次の文中の動詞を指摘し、どの活用形が用ゐられてゐるかを答へなさい。

イ 友と旅行をす^す。せし^すす^す私^私せ

ロ 風吹かば花散らむ。

ハ 雨ふりいづ。

ニ 瀬戸内海は到る處に岬あり、灣あり。

ホ 松柏の老樹を植ゑこまむとて、諸所にこれを求めたり。

ヘ よく泳ぐ者はよく溺る。

ト 年々に思ひやれども山水を汲みて遊ばむ夏なかりけり。

チ 人いかに笑ふとも、自ら守る所かたく、行道にたがはずば、何の恥づる

事かこれあらむ。

リ 今日^{今日}は差支あり、明日早くこよ。

ヌ 虎嘯^{うそ}けば風起る。

三 活用の種類

動詞の語尾が五十音圖の幾段にわたつて變化するかによつて、動詞の活用は九種類に分けられる。

一 四段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が、同じ行のアイウエの四段にわたつて活用するものをいふ。

動詞	語幹	語				尾
		未然形	連用形	終止形	連體形	
咲く	さ	か	き	く	く	け
歌ふ	うた	は	ひ	ふ	ふ	へ
		ア段	イ段	ウ段	段	エ段

カ行四段活用
ハ行四段活用

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

賣る。吹く。讀む。漕ぐ。打つ。飛ぶ。推す。待つ。習ふ。休む。去る。

四段活用

上二段活用

ニ上二段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のイ、ウの二段にわたつて活用し、且連體形になる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	起く	お						
朽つ	く							
イ	段	ち	ち	つ	つる	つれ	ち	
		ウ	ウ	段	イ	段	イ	段

力行上二段活用
力行上二段活用

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

落つ。強ふ。老ゆ。試む。盡く。亡ぶ。生く。閉づ。錆ぶ。

下二段活用

ニ下二段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のウ、エの二段にわたつて活用し、且連體形になる、已然形にれの添はるものを

いふ。

動詞	語幹		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	避く	さ						
教ふ	をし							
エ	段	へ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ	
		ウ	ウ	段	エ	段	エ	段

力行下二段活用
力行下二段活用

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

流る。受く。枯る。寄す。責む。捨つ。尋ぬ。交ず。榮ゆ。出づ。

四上一段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のイ段にだけ活用し、且終止形連體形になる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形

下一段活用

上一段活用に屬する動詞は右の例の外、次の十數語に過ぎない。
射る。鑄る。似る。干る。見る。(顧みる。惟みる。鑑みる。試みる)
居る。率ゐる。用ゐる。

動詞	着る	きる	きる	きる	きれ	きる
	(着)	き	き	き	き	き
語幹	煮る	に	に	に	に	に
	(煮)	に	に	に	に	に
尾	に	に	に	に	に	に

力行上一段活用
ナ行上一段活用

五下一段活用 次の例のやうに、動詞の語尾が同じ行のエ段に
だけ活用し、且終止形連體形に、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	蹴る	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	(蹴)	け	け	ける	ける	けれ	け
尾	に	に	に	に	に	に	に

下一段活用の動詞は蹴るの一語だけである。

變格活用

正格活用

カ行變格活用

以上の五種類の活用を、以下に述べる四種の變格活用に對して、
正格活用といふ。

六カ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾がカ行のイウ・オ
の三段にわたつて活用し、且連體形に、已然形にれの添はるもの
をいふ。

動詞	來	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	(來)						
尾	に	に	に	に	に	に	に

カ行變格活用の動詞は來の一語だけである。

サ行變格活用

七サ行變格活用 次の例のやうに、動詞の語尾がサ行のイウ・エ
の三段にわたつて活用し、且連體形に、已然形にれの添はるもの
をいふ。

ナ行變格活用

サ行變格活用の動詞は本來爲すの一語であるが、他の語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。次にその例をあげる。

罪す。勉強す。心地す。講ず。審つまびらかにす。

ハナ行變格活用 次の例のやうに動詞の語尾がナ行のアイウエの四段にわたつて活用し、且連體形にる、已然形にれの添はるものをいふ。

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
爲 <small>す</small>	(爲 <small>す</small>)	せ	し	す	する	すれ	せ
エ段	イ段	ウ	段	エ段	イ段	ウ	エ段

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
死ぬ	死 <small>し</small>	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ぬ
ア段	イ段	ウ	段	エ段	イ段	ウ	エ段

ラ行變格活用

ナ行變格活用の動詞は死ぬ往ぬの二語であるが、往ぬは現代文ではあまり用ゐられない。

ユラ行變格活用 次の例のやうに動詞の語尾がラ行のアイウエの四段にわたつて活用し、イ段で言ひきるものをいふ。

動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
有り	有 <small>あ</small>	ら	り	り	る	れ	れ
ア段	イ	ウ	段	エ	イ	ウ	エ

ラ行四段活用の動詞の終止形はウ段るであるが、ラ行變格活用の動詞の終止形はイ段りである。この點だけが兩者の相違である。

ラ行四段活用	ラ行變格活用	動詞	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
取る	有り	と	ら	り	る	る	れ	れ	
ア段	イ	ウ	段	エ	イ	ウ	エ	イ	

ラ行變格活用の動詞には有りの外に居り侍りの二語があるが、侍りは現代文では餘り使はれない。

注意——四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用以外の活用の動詞の命令形には、普通助詞のよをつけて用ゐる。

さて、ある動詞が如何なる活用に屬するかを識別する簡便な方法を次に述べよう。

一 上一段活用、下一段活用及び四種の變格活用の動詞は、その數が少いから、これを諳記する。

二 その他は次のやうな方法によつて、その種類を見分ける。

ア段にずが續くもの——四段活用

例 咲か(ア段)ず。

動詞の語尾
イ段にずが續くもの——上二段活用

動詞の活用の識別法

練習

一次の文中の動詞を指摘して、どの活用形が用ゐられてゐるかを述べ、且活用させてみなさい。

イ 我が國が世界に卓絶せる國體を保ち、上下三千年の國家を繼ぎて、ここに新運を開き、列國と對峙するに至れること、誠に故あるかな。

ロ 木の根に培ひ水そそぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉花實時に従ひ茂り榮ゆるなり。

ハ ちろくと岩つたふ水に這ひあがる赤き蟹みて杉の山靜か。

ニ かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かく荒れはてたる小堂に、風雨をだに防ぎかねて、彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人もなく、年月に荒れゆき、遂に跡かたもなくなりはて、これ等の事を

例 恥ぢ(イ段)ず。

エ段にずが續くもの——下二段活用

例 避け(エ段)ず。

も語り傳ふる人もなくならむかと、あまりにあはれに覺えしかば、委しく書きつけて歸れり。

二次の文中に誤があつたら、正しなさい。

イ 老ひたるをも若きをも率いて、敵にむかいたり。

ロ 花は咲けども、雪は消えず。

ハ 學問は重き荷を負いて坂を攀づるが如し。

ニ 雨滴も絶へざれば、石を穿つ。

ホ 棄てる神あれば、助ける神あり。

ヘ その行、感づるに堪えたり。

ト 明治神宮に詣ずるもの、廣前の松に思を致する所なかるべけんや。

三次の文の空所を補ひなさい。

イ 後に悔□とも及ばじ。

ロ 庭には萩數株を植□たり。

ハ 爲すある人には、如何なる場合も我が力を試□に足るべきなり。

ニ 砲臺を構□て、大砲を据□つく。

四次の動詞の各活用形を使つて短文を作りなさい。

選ぶ。得。支ふ。練習す。暮る。

四 形容動詞

一 水清かり。風烈しかり。

ニ 波靜かなり。冬暖かなり。

三 前途洋々たり。風采堂々たり。

右の例の傍線を施した語は、事物の性質や状態を表してゐる點では、形容詞の性質を帯びてゐるが、その活用はラ行變格活用動詞と同じであるから、この種の語を特に形容動詞と名づけ、動詞に準じて取扱ふ。

一は形容詞の連用形に、ラ行變格活用の動詞ありが結びついて

清くあり——清かり——烈しくあり——烈しかり

形容動詞

形容動詞の活用

となつたものである。

二は靜かに暖かになどといふにの結びついた副詞に、ラ行變格活用の動詞ありが結びついて

靜かにあり——靜かなり——暖かにあり——暖かなりとなつたものである。

三は洋々と堂々となどいふとの結びついた副詞に、ラ行變格活用の動詞ありが結びついて

洋々とあり——洋々たり——堂々とあり——堂々たりとなつたものである。

形容動詞の活用

清静 かかな 洋々 た	語幹	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
	尾	ら	り	り	る	れ	れ

練習

次の文中の形容動詞を指摘し、且活用させてみなさい。

イ 遠からむ者は音にも聞け、近からむ者は目にも見よ。

ロ 溫和なる氣候は國民の性質を穩健ならしむ。

ハ 夏涼しくして、冬暖かなり。

ニ 天黒くして四邊暗澹たり。

ホ 二つ三つ摘み残されし綿の實の色寒げなり冬山里。

第二節 口語動詞

口語動詞の活用には、四段活用上一段活用下一段活用力行變格活用サ行變格活用の五種がある。

一 四段活用 文語の四段活用と同様に活用する。文語のナ行變格活用ラ行變格活用は、口語では四段活用になる。

四段活用

上一段活用

文	口	文	口	文	口	動詞
有	有	死	死	咲	咲	語幹
り	る	ぬ	ぬ	く	く	未然形
あ		し		さ		連用形
ら	ら	な	な	か	か	終止形
り	り	に	に	き	き	連體形
り	る	ぬ	ぬ	く	く	已然形
る	る	ぬ	ぬ	く	く	命令形
れ	れ	ぬ	ぬ	け	け	
れ	れ	ぬ	ぬ	け	け	

(*口は口語の略、*文は文語の略、以下同様)

練習

次の動詞を活用させてみなさい。

居る。押す。

二上一段活用 文語の上一段活用と同様に活用する。文語の

(口)
死ぬ人
死ねば……
書物がある。

(文)
死ぬる人
死ぬれば……
書籍あり。

上二段活用は口語では上一段活用となる。

文	口	文	口	動詞
起	起	着	着	語幹
く	きる	る	る	未然形
お		(着)		連用形
き	き	き	き	終止形
き	き	き	き	連體形
く	きる	きる	きる	已然形
くる	きる	きる	きる	命令形
くれ	きれ	きれ	きれ	
き	き	き	き	

練習

次の動詞を活用させてみなさい。又右の例にならつて、口語・文語兩様の活用を表に書きなさい。

報いる。落ちる。過ぎる。居る。

下一段活用

三 下一段活用 文語の下一段活用と同様に活用する。文語の
下二段活用は口語では下一段活用となる。

カ行變格活用

動詞	蹴る	蹴る	蹴る	蹴る
語幹	蹴	蹴	蹴	蹴
未然形	蹴	蹴	蹴	蹴
連用形	蹴	蹴	蹴	蹴
終止形	蹴	蹴	蹴	蹴
連體形	蹴	蹴	蹴	蹴
已然形	蹴	蹴	蹴	蹴
命令形	蹴	蹴	蹴	蹴

(口) 賞を受ける。賞を受く。
賞を受ける人 賞を受くる人
賞を受ければ 賞を受くれば

(文) 蹴る

練習

次の動詞を活用させてみなさい。又右の例にならつて、口語・文語兩様の活用を表に書きなさい。

撫でる。告げる。交ぜる。植ゑる。

カ行變格活用

文語のカ行變格活用と同じく、口語でもイウオの三段にわたつて活用するが、ただ口語では終止形にるが添はる點が違ふ。

サ行變格活用

動詞	くる	くる	くる	くる
語幹	來	來	來	來
未然形	來	來	來	來
連用形	來	來	來	來
終止形	來	來	來	來
連體形	來	來	來	來
已然形	來	來	來	來
命令形	來	來	來	來

(口) 人がくる。
(文) 人く。

サ行變格活用

文語のサ行變格活用と同じく口語でもイウエの三段にわたつて活用するが、口語では終止形にるが添はり、未然形・命令形にせの外に別にしに活用する點が違ふ。

動詞	する	する	する	する
語幹	爲	爲	爲	爲
未然形	爲	爲	爲	爲
連用形	爲	爲	爲	爲
終止形	爲	爲	爲	爲
連體形	爲	爲	爲	爲
已然形	爲	爲	爲	爲
命令形	爲	爲	爲	爲

(口) 病氣をせぬ。
病氣をしない。
病氣をする。
勉強せよ。
勉強しろ。

(文) 病氣をせず。
病氣をす。
勉強せよ。

注意——上一段下一段サ行變格活用の動詞の命令形には助詞よ又はろを添へる。カ行變格活用の動詞の命令形には助詞いを添へる。

練習

一次の傍線をつけた動詞を、口語に直してみなさい。
イ歩を返して木蔭を過ぐるに燈光のかけ木の間を洩れて、人の夜涼に語るあり。

ロ財貨は盡くることあれども、芳名は朽つることなし。

ハ珍客來ればとて、置物おき、掛物かけなどす。

ニ人はパンのみにて生くる者にあらず。

ホ黒雲見ゆ。やがて風吹かむ。

二次の動詞について、口語か文語かを分けなさい。

傳へる。下りる。飛ぶ。志す。据ゑる。親しむ。改まる。違へる。

叫ぶ。見ゆ。

口語の形容動詞

口語の形容動詞は

暖かなら行きませう。

暖かな日です。

のやうな用法が少しあるだけで、完全な活用形は備つてはゐない。

第三節 形容詞

活用

形容詞の活用は五十音圖の同一行の間に行はれず、カ行・サ行の兩行に跨つて行はれる。

文語形容詞の活用は二種あつて、ク活用シク活用と名づける。

一ク活用

ク活用

形容詞	語幹	語尾			
清し	清	未然形	連用形	終止形	連體形
		く	く	し	き
					けれ

ニシク活用

シク活用

形容詞活用
の名稱

形容詞	語幹	語				尾
新し	新 <small>あた</small>	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
		しく	しく	し	しき	しけれ

形容詞の活用形の名稱は、動詞の活用形の名稱に準じてつけたのである。今次に其の用例を示す。

ク活用

(未然形) 水清くば魚住まじ。
水清くとも魚住まむ。
(連用形) 水清く流る。
(終止形) 水清し。
(連體形) 水清き流あり。
(已然形) 水清ければ魚住まず。
水清けれども魚住みたり。

シク活用

品新しくば我買はむ。
品新しくとも我は買はじ。
新しく作りいだす。
品新し。
品新しき店あり。
品新しければ價高し。
品新しけれども安價なり。

口語形容詞
の活用

口語の形容詞の活用は、未然形を缺く點及び終止形連體形が文語の活用と違ふ。

形容詞	活用	語幹	語				尾
清い	ク活	清 <small>き</small>	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
清し			く	く	い	い	けれ
新しい	シク活	新 <small>あたら</small>	○	しく	しい	しい	しけれ
新し			しく	しく	し	しき	しけれ

(口) 水が清い。
清い水
(文) 水清し。
清き水
この本は新しい。
この本は新し。
新しい本
新しき本

練習

一次の文中の形容詞を指摘し、どの活用形が使はれてゐるか述べなさい。
 1 風烈しければ、波高し。
 2 蓬麻中に生ずれば扶けずして直し。
 ハ ところよき刺身の皿の紫蘇の實に秋は俄かに冷えいでにけり。

ニ 淋しければ二人でゆけ。
 ホ こちらは舊く、そちらは新しい。
 ヘ 品がよければ買はう。
 ト 新しい品はよいが餘り高い。
 チ 暑い寒いも彼岸まで。

二次の形容詞の各活用形を用ゐて短文を作りなさい。

おもしろい。青し。やかましい。易し。ふさはしい。恐ろし。寒い。
 大きい。繁し。難し。

第四節 音便

語と語とが連る時、發音の便宜上或音が他の音に轉ずることがある。これを音便と名づける。こゝでは、動詞・形容詞が他の語に連る時あらはれる音便を一括して述べる。

音便

動詞の音便

動詞の音便 四段・ナ行變格・ラ行變格活用の動詞の連用形に於て表れ、次の四種がある。

イ音便

一 イ音便 活用の語尾がいに轉ずるもの。

鳴き^て 鳴い^て (文語・口語) 鳴きた 鳴いた (口語)

仰ぎ^て 仰い^て (文語・口語) 仰ぎた 仰いだ (口語)

仰しやります。 仰しやいます。 (口語)

ござります。 ございます。 (口語)

ウ音便

二 ウ音便 活用の語尾がうに轉ずるもの。

争ひ^て 争う^て (文語)

問ひ^て 問う^て (文語・口語) 問ひた 問うた (口語)

乞ひ^て 乞う^て (文語・口語) 乞ひた 乞うた (口語)

撥音便

三 撥音便 活用の語尾が撥音んに轉ずるもの。

死^{にて} 死^{んで} (文語・口語) 死^にた 死^んだ (口語)

促音便

形容詞の音便

イ音便

ウ音便

飛びて 飛んで (文語・口語) 飛びた 飛んだ (口語)

踏みて 踏んで (文語・口語) 踏みた 踏んだ (口語)

四 促音便 活用の語尾が促音つに轉ずるもの。

勝ちて 勝つて (文語・口語) 勝ちた 勝つた (口語)

思ひて 思つて (文語・口語) 思ひた 思つた (口語)

取りて 取つて (文語・口語) 取りた 取つた (口語)

有りて 有つて (文語・口語) 有りた 有つた (口語)

行きて 行つて (口語) 行きた 行つた (口語)

形容詞の音便 次の二種がある。

一 イ音便 連體形の語尾のきがいに轉ずるもの。

善きかな 善いかな (文語)

美しき花 美しい花 (文語)

二 ウ音便 連用形の語尾のくがうに轉ずるもの。

全くす 全うす (文語)
美しく咲く。 美しく咲く。 (文語・口語)

練習

次の文に誤があつたら、正しなさい。

イ 任重ふして、道遠し。

ロ 朝には星を戴いて出で、夕には月を踏んで歸る。

ハ 負ふた子に髪なぶらるる暑さかな。

ニ 飛むで火に入る夏の蟲。

ホ 一を聞いて十を知る。

ヘ あの山は嶮しふござひます。

ト 人が何と言うても聞きいれない。

第五節 文語助動詞の種類・接續及び活用

一 受身の助動詞

受身の助動詞

接続

犬、人に打たる。
犬、人に蹴らる。

右の例の傍線を施した助動詞るらるは、動作を他から受ける意味を表すから、これを受身の助動詞といふ。

るは四段活用ナ行變格活用ラ行變格活用の動詞の未然形に續き、らるは、その他の活用の動詞の未然形に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る	れ	れ	る	るる	るれ	れ
らる	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ

(動詞の下二段活用に等し)

可能の助動詞

ニ可能の助動詞
船にても汽車にても行かる。
この間は誰にも答へらる。

接続

腰間の秋水鐵をも斷つべし。
右の例の傍線を施した助動詞、るらるべしは、或動作をなすことが出来る意味を表すから、これを可能の助動詞といふ。
可能の助動詞るらるが動詞に接続する規定は、受身の助動詞るらると同じであるが、活用には命令形を缺いてゐる。
べしは、動詞の終止形に續く。但しラ行變格活用の動詞には、その連體形に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○

(形容詞のク活用に等し)

活用
自發の助動詞

可能の助動詞るらるは、動作が自然に起つて來て止められぬ意味を表すことがある。これを特に自發の助動詞といふ。
亡き人の事のみ思はる。

行末案ぜらる。

練習

一次の文中の受身可能の助動詞を指摘して、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ花は櫻木の諺思ひいでらる。

ロ規則を犯して罰せらるる者多し。

ハ善き行をして人に譽められよ。

ニ一時間に十枚も讀まるればよき方なり。

ホつながら眠らむとする牛の顔にをりをりさはる青柳の絲。

二次の動詞に受身可能の助動詞を續けて短文を作りなさい。

越ゆ。答ふ。堪ふ。通す。

使役の助動詞

使役の助動詞

病人に藥を飲ます。

大工に家を建てさす。

小使に黑板の字を消さしむ。

右の例の傍線を施した助動詞「さす」「しむ」は、動作を他人にさせる意味を表すから、これを使役の助動詞といふ。

すは、四段活用「す」行變格活用「う」行變格活用動詞の未然形に、「さす」は、その他の活用の動詞の未然形に、「しむ」は、すべての動詞の未然形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す	せ	せ	す	する	すれ	せ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ

(動詞の下二段活用に等しい)

崇敬の助動詞

四 崇敬の助動詞

兄上、朝鮮に行かる。

先生は明日出發せらる。

殿下式場に臨ませらる。(せの本形はす)

攝政宮殿下九州に行啓させ給ふ。(させの本形はさす)

皇太子御位に即かしめ給ふ。(しめの本形はしむ)

右の例の傍線を施した助動詞るらるすさすしむは他の動作を尊敬する意味を表してゐる。

謹みて新年を賀したてまつる。

御待ちいたすべし。

御話しまうす事いろいろあり。

本日出發仕り候。

右の例の傍線を施したたてまつるいたすまうす候などは、本來動詞であるが、ここでは他人に對して、動作を鄭重にいふ意味をあらはす助動詞となつてゐる。

接續

かやうに、他の動作を敬ひ、又は動作を鄭重にいひあらはす時に用ゐられる助動詞を、**崇敬の助動詞**といふ。

るらるすさすしむが動詞に接續する規定は、受身の助動詞るらる、使役の助動詞すさすしむが動詞に接續する規定と同じである。活用も亦同じである。

本來の動詞から崇敬の助動詞になつたものは、すべて動詞の連用形に接續する。

練習

一次の文中の使役崇敬の助動詞を指摘して、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 陛下御參拜あらせらる。

ロ 父君、汝が首途の祝として舊臣どもに謠をうたはせむ。しばし待て。とて、兄をしてその用意をせさせ給ふ。

ハ 囊中の文書は皆、岩倉公が塾居中に計畫せられて、玉松操といふ人に

時の助動詞
完了

起草せしめられつる復古經綸の策案なりき。
 二 天顔殊に麗しく笑ませ給ふ。
 ホをさな子に矢を拾はせて春の日を弓にくらせり花の下かけ。
 二次の動詞に、使役、崇敬の助動詞を續けて、短文を作りなさい。
 書く。撃つ。捧讀す。起く。

五時の助動詞

イ完了の助動詞

今日も暮らしつ。
 花咲きぬ。
 月、山の端に出でたり。
 本を買へり。

右の例の傍線を施した助動詞つぬたりりは動作の完了した意味を表すから、完了の助動詞といふ。

接續

活用

過去

つぬたりは動詞の連用形に接續する。但し、ぬはナ行變格活用の動詞には接續しない。
 りは四段活用の動詞の已然形、サ行變格活用の動詞の未然形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
つ	て	て	つ	つる	つれ	て
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	○
り	○	○	り	る	○	○

(動詞の下二段活用に等しい)
 (動詞のナ行變格活用に等しい)
 (動詞のラ行變格活用に似てゐる)

ロ過去の助動詞

昨日は雪降りき。
 花は皆散りけり。

接續
活用

右の例の傍線を施した助動詞きけりは動作の既に過ぎ去つた意味を表すから、これを過去くわこの助動詞といふ。
きけりは動詞の連用形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
き	○	○	き	し	しか	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

(特殊の活用)
(動詞のラ行變格活用に似てゐる)

きがカ行變格活用サ行變格活用の動詞に續く時には、次のやうな例外がある。

カ變	未然形	連用形
こ	こ	き
し	し	し
か	か	か
サ變	未然形	連用形
せ	せ	し
し	し	し
か	か	か
し	し	し
き	き	き

ハ未來の助動詞

未來

明日は遠足に行かむ。

右の例の傍線を施した助動詞むは動作が未來に起る意味を表すから、これを未來みこの助動詞といふ。

むは動詞の未然形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○

(特殊の活用)

練習

次の文中の時の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。

- イ 昔この里に一人の男ありけり。
- ロ 訪ねつる人はあらず。
- ハ 明けぬる空に月残れり。
- ニ 面白く咲きたる櫻を長く折りて歸りぬ。

接續
活用

ホこの流派の絶えむことの悲しさよ。
へ草庵や夜の間を降りし秋の雨。

六 打消の助動詞

花咲かず。

彼はまだ遠くは行かじ。

その教は一生背くまじ。

右の例の傍線を施した助動詞「ず」「まじ」は動作を否定する意味を表すから、これを「打消の助動詞」といふ。

「ず」は動詞の未然形に接続する。

「まじ」は動詞の終止形に接続する。但しラ行變格活用の動詞だ

けには、その連體形に接続する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○

〔特殊の活用〕

打消の助動詞

接続

活用

まじ	じ	○	○	じ	○	○	○	○
まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	○	○	○

〔形容詞のシク活用に等しい〕

七 推量の助動詞

なしえざるものあらむ。

いかがしけむ。

しづ心なく花の散るらむ。

御室の山に時雨ふるらし。

山のあなたは雨降るべし。

右の例の傍線を施した助動詞「むけむらむらしべし」は物事を推量する意味を表すから、これを「推量の助動詞」といふ。

「む」は動詞の未然形に接続する。

「けむ」は動詞の連用形に接続する。

推量の助動詞

接続

活用

らむらしべしは動詞の終止形に接續する。但しラ行變格活用の動詞にはその連體形に接續する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む	○	○	む	む	め	○
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ	○
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ	○
らし	○	らしく	らし	らしき	○	○
べし	○	べく	べし	べき	べけれ	○

(特殊の活用)

(形容詞のシク活用に似てゐる)
(形容詞のク活用に等し)

古文では、此の外にましめりなどが用ゐられてゐる。

練習

次の文中の既修の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 偽りても賢を學ばむを賢と言ふべし。

ロ 言はずとも明らかなるべき事ならむ。

ハ 花まだ咲くまじく見ゆ。

ニ 雉も鳴かずばうたるまじ。

ホ かなはじとや思ひけむ太刀を捨てて逃げ失せたり。

ヘ 吹きあれて千鳥も鳴かぬ月夜かな。

ト ほととぎす鳴くべき時になりけりひと日は訪はせ駒込の里。

ハ 指定の助動詞

學科は國語なり。

花の散りくるなり。

そは汝の悪しきなり。

君君たり、臣臣たり。

指定の助動詞

右の例の傍線を施した助動詞なり、たりは物事を指定する意味を表すから、これを指定の助動詞といふ。

接續

なりは體言及び動詞形容詞の連體形に接續する。
たりは體言にのみ接續する。

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	○
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

(動詞のラ行變格活用に等し)

詠歎の助動詞

九 詠歎の助動詞

秋の野に人まつ蟲の聲すなり。

見渡せば花も紅葉もなかりけり。

右の例の傍線を施した助動詞なりけりは詠歎の意味を表すから、これを詠歎の助動詞といふ。

なりは動詞の終止形に接續する。但しラ行變格活用の動詞にはその連體形に接續する。

接續

活用

けりは、すべての動詞の連用形に接續する。けりの接續の規定は過去の助動詞けりと同様である。そこで用ゐられたけりが過去か詠歎かは、その時々で判断するより外は無。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	○	○	なり	なる	なれ	○
けり	○	○	けり	ける	けれ	○

(ラ行變格活用に似てゐる)

一〇 希望の助動詞

一日も早く行きたし。

右の例の傍線を施した助動詞たしは、物事を希望する意味を表すから、これを希望の助動詞といふ。
たしは動詞の連用形に接續する。

希望の助動詞

接續

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たし	○	○	たし	たし	たし	○

たし たく たく たし たき たけれ ○

(形容詞のク活用に等し
い)

二 比況の助動詞

歲月流るるがごとし。

光陰矢のごとし。

歲月流るるごとし。

漕ぎゆく船のあとなきごとし。

右の例の傍線を施した助動詞ごとしは、物事をくらべて説明する意を表すから、これを比況ひきやうの助動詞といふ。

ごとしは助動詞がの及び動詞・形容詞の連體形に接續する。

比況の助動詞

接續

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	○	○

(形容詞のク活用に似て
ゐる)

練習

次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ、接續を説き、且助動詞のどの形が使はれてゐるかを言ひなさい。

イ 身王侯たれども驕らず。

ロ 今朝のごとき地震は、近ごろ稀なり。

ハ 競馬遅れし一騎あはれなり。

ニ 聞くがごとくば水害甚だしかりしと。

ホ 大原女がいたたく柴も濡れにけり北山あたり時雨しぬらむ。

ヘ 花見にも行きたく、講演會にも行きたくし。

以上説明したやうに、助動詞はその意味の上から十一種に分けられるが、活用の型から見る時は次のやうに分けられる。

一 動詞型活用のもの

イ 下二段型活用のもの

ニ 形容詞型活用のもの

まじ	べし	種類	活用
打消	可能推量		
まじく	べく	未然形	
まじく	べく	連用形	
まじ	べし	終止形	
まじき	べき	連體形	
まじけれ	べけれ	已然形	
○	○	命令形	
		備考	

ハ 奈行變格型活用のもの

ぬ	種類	活用	けりなり	たりなり
時(完了)				
な	未然形		○ ○	た なら
に	連用形		○ ○	た たりなり
ぬ	終止形		けりなり	たりなり
ぬる	連體形		けるなる	たるなる
ぬれ	已然形		けれなれ	たれなれ
ぬ	命令形		○ ○	たれ ○
	備考			

ロ 良行變格型活用のもの

けり	り	たり	種類	活用	つ	しむ	さす	す	らる	る	種類	活用
時(過去)		時(完了)			時(完了)	崇敬	使役	可敬	受身			
○	○	た	未然形		て	しめ	させ	せ	られ	れ	未然形	
○	○	た	連用形		て	しめ	させ	せ	られ	れ	連用形	
けり	り	たり	終止形		つ	しむ	さす	す	らる	る	終止形	
ける	る	たる	連體形		つる	しむる	さする	する	らるる	るる	連體形	
けれ	○	たれ	已然形		つれ	しむれ	さすれ	すれ	らるれ	るれ	已然形	
○	○	○	命令形		て	しめ	させ	せ	られ	れ	命令形	
			備考						形が 合は 可能 ない の場		備考	

三 特殊の活用をするもの

たし	希望	たく	たく	たし	たき	たけれ	
ごとし	比況	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	〇	〇

種類	活用		未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	備考
	むき	む							
むき	時(過去)	時(未來)	〇〇	〇〇	むき	むし	めしか	〇〇	むはんとも 書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く
む	む	む	〇〇	〇〇	む	む	め	〇〇	むはん けむはけん とも書く

練習

一次の文中活用ある語を指摘して、活用させて見なさい。

イ 余等の一たび掩壕に入るや、初より生を期せず。然るに今正月元旦、満山盡く旭旗の翻るを見ては、いひ知らぬ感に打たれて覺えず涙を催せり。

ロ 人の香といふ演題にて、花ならば梅たり、薔薇たり、蘭花たらむことを人々に求め候ひき。

ハ 金殿玉樓にも樂しからぬ折はあるべく、茅店草屋にも樂しき處はあるべし。

ニ もとより手細工にせし事にはあれど、聊か資本もかかりたり。この分にては水も飲まれ申さずとかこちけり。

ホ 呼びにやりし友より呼びにおこせけり、雨はいづこも寂しかるらむ。二次の表を作つてみなさい。

イ 動詞の未然形に續く助動詞

ロ 動詞の連用形に續く助動詞

ハ 動詞の終止形に續く助動詞

受身の助動詞

接續

活用

- ニ 動詞の連體形に續く助動詞
- ホ 動詞の已然形に續く助動詞

第六節 口語助動詞の種類・接續及び活用

一 受身の助動詞

人からよく言はれる。
先生から注意せられる。

れるは四段活用の動詞の未然形に續き、られるはその他の活用の動詞の未(サ)變動詞はせの方)に續く。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られ

(動詞の下一段活用に等しい)
命令形には助詞よ、又はろを附けて用ゐる。

練習

次の動詞に受身の助動詞を續けて短文を作りなさい。
育てる。蹴る。打つ。する。

ニ 可能の助動詞

この本は一日に讀まれる。
ここから充分に見られる。

動詞に接續する規定は受身の助動詞れる、られるが、動詞に接續する規定と同じである。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
れる	れ	れ	れる	れる	れれ	れ
られる	られ	られ	られる	られる	られれ	られ

受身の助動詞と異なるのは命令形を缺いてゐる點である。

この助動詞は又動作の自然に起つて止められぬ意味を表す場

活用

接續

可能の助動詞

自發の助動詞

合にも使ふ。その時は特に自發の助動詞といふ。

例。效用の廣いのに驚かれる。

兄のことが考へられる。

練習

次の動詞に可能、自發の助動詞を續けて、短文を作りなさい。
生きる。思ふ。來る。勉強する。行く。

使役の助動詞

使役の助動詞

今日は休ませる。

試験を受けさせる。

せるは四段活用の動詞の未然形に續き、させるはその他の活用の動詞の未然形に(サ變動詞はせの方)に續く。

活用

助動詞 未然形 連用形 終止形 連體形 已然形 命令形

せる	せ	せ	せる	せる	せれ	せ
させる	させ	させ	させる	させる	させれ	させ

(動詞の下一段活用に等しい)
命令形には助詞よ又はろをつけて用ゐる。

練習

次の動詞に使役の助動詞を續けて短文を作りなさい。
書く。捨てる。消す。準備する。

四 崇敬の助動詞

校長先生がかう言はれる。

ベルが鳴つて、先生は教壇をおりられる。

私も行きます。

れるられるが動詞に接續する規定は、受身の助動詞れるられるが動詞に接續する規定と同じで、その活用も兩者同じである。ますは、すべての動詞の連用形に接續する。

崇敬の助動詞

接續

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ます	ませ	まし	ます	ます	ますれ	ませ まし

(特殊の活用)

練習

次の動詞に崇敬の助動詞を續けて短文を作りなさい。
好む。出發する。起さる。差上げる。

五時の助動詞

イ 完了と過去

今、十時が鳴った。(完了)

昨夜雨が降った。(過去)

文語では完了の助動詞と過去の助動詞とは別であるが、口語では、完了も過去も共に助動詞たの一つで表してゐる。
たはすべての動詞の連用形に接續する。

接續

時の助動詞
完了
過去

活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
た	たら	たり	た	た	たら	○

(特殊の活用)

練習

次の動詞に助動詞たを續けて短文を作りなさい。

咲く。見る。尋ねる。學ぶ。

ロ 未來の助動詞

明日は歸らう。

明日は遠足しよう。

うは四段活用の動詞の未然形に接續し、ようはその他の活用の動詞の未然形(佐行變格活用動詞の未然形はしの方)に接續する。
うようは終止形だけしか使はれてゐない。

打消の助動詞

接續

未來

六 打消の助動詞

接続

活用

何も見えぬ。 誰も来ない。
 花はまだ咲くまい。 夜はまだ明けまい。
 ぬないはすべての動詞の未然形に接続し、まいは四段活用の動詞の終止形及び四段活用以外の活用の動詞の未然形(左行變格活用動詞の未然形はしの方)に接続する。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ぬ	○	ず	ぬ	ぬ	ね	○
ない	○	なく	ない	ない	なけれ	○
まい	○	○	まい	まい	○	○

(特殊の活用)
 (形容詞のク活用に似てゐる)
 (特殊の活用)

練習

次の動詞に打消の助動詞を續けて短文を作りなさい。
 降る。 延びる。 干る。 受ける。 くる。

推量の助動詞

活用

七 推量の助動詞

あちらでは雪が降つてゐるであらう。
 あの店にも賣つてゐよう。
 月が出るらしい。

うは四段活用の動詞の未然形に接続し、ようはその他の活用の動詞の未然形(左行變格活用動詞の未然形はしの方)に接続し、らしいはすべての動詞の終止形に接続する。

うようは終止形だけしか使はれてゐない。

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らしい	○	らしく	らしい	らしい	○	○

(形容詞の活用に類する)

練習

次の動詞に推量の助動詞を續けて短文を作りなさい。

指定の助動詞

散る。ゐる。明ける。運動する。
ハ指定の助動詞

こんどの時間は國語だ。

正成は忠臣です。

だてすは體言の下に續く。

接續
活用

希望の助動詞

九希望の助動詞

今日も行きたい。

たいはすべての動詞の連用形に接續する。

接續
活用

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
だ	だら	だつ	だ	○	○	○
です	でせ	でし	です	○	○	○

(特種の活用)

助動詞	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

練習

次の動詞に希望の助動詞を續けて短文を作りなさい。

見る。取る。讀む。染める。

文語の比況の助動詞ごとして相當する口語の助動詞は無いが、
通例は名詞やうに指定の助動詞だてすを結びつけたものを用ゐる。

例 花が雪のやうだ。

歲月は流れるやうです。

以上述べた口語の助動詞は、活用の型から見て、次のやうに分けられる。

一 下一段動詞型活用のもの

たい	○	たく	たい	たい	たけれ	○
----	---	----	----	----	-----	---

(形容詞のク活用に等し)

二 形容詞型活用のもの

される	せる	られる	れる	種類 活用
崇敬	使役	崇敬	可能	受身
させ	せ	られ	れ	未然形
させ	せ	られ	れ	連用形
させる	せる	られる	れる	終止形
させる	せる	られる	れる	連體形
させ	せ	られ	れ	已然形
させ	せ	られ	れ	命令形
		形を缺く	可能の場合 合は命令	備考

三 特殊の活用をするもの

ない	たい	らしい	種類 活用
打消	希望	推量	
○	○	○	未然形
なく	たく	らしく	連用形
ない	たい	らしい	終止形
ない	たい	らしい	連體形
なければ	たけれ	○	已然形
○	○	○	命令形
			備考

練習

です	だ	た	ます	まい	ぬ	種類 活用
指定	指定	時(完了過去)	崇敬	打消	打消	
でせ	だら	たら	ませ	○	○	未然形
でし	だつ	たり	まし	○	ず	連用形
です	だ	た	ます	まい	ぬ	終止形
○	○	た	ます	まい	ぬ	連體形
○	○	たら	ますれ	○	ね	已然形
○	○	○	ませ	○	○	命令形
					ぬはんと も書く	備考

一次の文中の助動詞を指摘し、その種類を述べ接續を説き、助動詞のどの活用形が使はれてゐるかを言ひなさい。
イ村の竹藪から昇つた青い煙は、畑の百姓を迎へにでも出たやうに、幾筋もたな引いて、田圃から岡まで届かうとしてゐる。

口「啼かぬなら殺してしまへ時鳥」これは信長の氣質を譬へた句だと言はれてゐるが、實際彼は随分短氣であつたらしい。
 ハ先帝はかく萬機の政を聞しめされながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用遊ばされたのでございました。
 二次の表を作つてみなさい。

イ動詞の未然形に續く口語助動詞。

ロ動詞の連用形に續く口語助動詞

ハ動詞の終止形に續く口語助動詞

第四章 助詞

第一節 體言に續く助詞

體言の下に續く助詞には

がのにをへとよりからまで等がある。

に

この中で特に注意すべきものに就いて略説する。

に(に)
(*括弧内は口語の助詞。以下同様)

文語

上野驛に着きたり。

口語

上野驛に着いた。

右の例のやうに、には動作の歸着點を示すのに用ゐられる。

へ(へに)

文語

東の方へ行く。

口語

東の方へ行く。

東の方に行く。

學校へ行く。

學校に行く。

右の例のやうに、へは文語では動作の進行する方向を示すのに用ゐられ、口語では動作の進行する方向を示すと共に、動作の歸着

點を示すにも用ゐられる。即ち口語では、にとへとを區別せずに使つてゐる。

と(と)

月と花とを賞す。

松島と天の橋立と嚴島とを日本の三景といふ。

事物を並列する時は、右のやうにその一々の下にとを添へるのであるが、誤解を生じない限り、最終の語句の下のとは省いてもよい。

例 月と花を賞す。

京都と大阪と神戸へ行つた。

但し次のやうな場合には之を省くことは出来ない。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

ば

第二節 動詞・形容詞・助動詞に續く助詞

この種の助詞には

ば・とともどもにをがてでつつながらばやなむな等がある。

この中で特に注意すべきものに就いて略説する。

ば(ばのてから)

文語

一 雨降らば行かじ。

二 雨降れば行かず。

三 水清くば飲まむ。

四 水清ければ魚住まず。

口語

イ 雨が降れば行くまい。

ロ 雨が降れば行かない。

イ 水が清ければ飲まう。

ロ 水が清ければ魚は住まない。

右の例の一のやうに、文語では、未然形に續いたばは假定の條件を表し、二のやうに已然形に續いたばは確定の條件を表す。

口語では已然形の下に附けたばでイ假定條件□條件が己になりたつたものと假定する場合を表す。

ので・から

口語では、確定の條件は多く終止形にので・からを添へて表す。

風が吹くので花が散る。

風が吹くから花が散る。

とも(ても)

とも

文語

口語

悔むとも及ばじ。

行つても留守だらう。

風吹かずとも花散らむ。

風が吹かなくても花は散らう。

悲しくとも忍ばむ。

悲しくても忍ばう。

右の例のやうに文語のともは動詞の終止形、形容詞の未然形に續いて假定の條件を表し、口語のともは動詞・形容詞の連用形に續いて假定の條件を表す。(助動詞との結びつき方は、動詞・形容詞に

ど・ども

準じて、考へてよろしい。以下皆これに同じい。

どども(けれどけれども)

文語

口語

悔め
どど
そのかひなし。

悔む
けれど
そのかひはない。

風吹かね
どど
花散れり。

風は吹かない
けれど
花が散つた。

悲しけれ
どど
忍べり。

悲しい
けれど
忍んだ。

右の例のやうに文語のどどもは活用する語の已然形に續いて確定の條件を表し、口語のけれどどもは活用する語の終止形に續いて確定の條件を表す。

練習

次の文に誤があつたら正しなさい。又全文を口語に直しなさい。

イ 同じ罪に行はるとも後悔せじ。

ロ 日落ちて後宿へ着きたり。

ハ 高橋と小島の弟は同級なり。

ニ 風吹けば波立たむ。

ホ 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。

ヘ 見事かの頭上の林檎を射落せば、汝が命を助けむ。

がにを

がにを(がにのに)

文語

努力せしが效なかりき。

口語

努力したが效がなかつた。

努力したのに效がなかつた。

日暮れたるに宿るべき家なし。

日が暮れたのに宿る家もない。

花咲きたるに未だ寒し。

花が咲いたのにまだ寒い。

いそがずばぬれざらまし

を旅人のあとよりはるる

野路の村雨。

右の例のやうにがにををは活用する語の連體形に續いて確定の條件を表し、同時にその條件とは反對の結果が下に起ることを表す。

ををは文語に限つて用ゐられる。

口語では、のにを用ゐることが多い。のには活用する語の連體形に續く。

てで

てで(てないで)

文語

日暮れて道遠し。

口語

日が暮れて道が遠い。

何事も言はで止みぬ。

何事も言はないで止めた。

右の例のやうにては活用する語の連用形に續いて語句接續の

用をなし、では活用する語の未然形に續いて、打消の意を表して語句を接續する。

では打消の助動詞ずと助詞てとの結びついたずての音の變化したものである。

文語のでを用ゐる場合に口語ではないでを用ゐる。ないでは活用する語の未然形に續く。

ばや・なむ

ばやなむ。

早く都に歸らばや。

今一度の御幸待たなむ。

右の例のやうに、ばやなむは願望の意味を表し、動詞の未然形に續く。

な

な(な)

文語

口語

怠りて過すな。

怠つて過をするな。

危きに居るな。

危いところに居るな。

右の例のやうに、なは禁止の意味を表し、動詞助動詞の終止形に續く。(ラ行變格活用の動詞には、その連體形に續く。)

この外、古文では「な……その形で禁止の意味を表すが、現代文では餘り使はれない。

春な忘れそ。

な折りそ。

第三節 種々の語に續く助詞

この種の助詞には

はもぞなむこそやかばかりのみだにさへすらかなよかし等がある。

ぞ

此の中で特に注意すべきものに就いて略説する。

ぞ(ぞ)

文語

そは何ぞ。

汝は何物なるぞ。

我は知らぬぞ。

口語

僕は行かないぞ。

右の例のぞは、文の終に有つて物事を強く指示し、或は餘情を添へる意を表す。ぞが活用する語に續く時は、その連體形を受ける。

花ぞ流るる。

鳴く鹿の聲きく時ぞ秋は悲しき。

右の例のぞは物事を強く指示する意を表すと共に、文の結に關係を持つてゐる。即ちこの時は文を活用する語の連體形で結ぶ。このやうに文の結に關係を及ぼす語を係詞かひりごといひ、これに應じて

係詞

結詞

なむ

文を結ぶ語を結詞かひりごといひ、この關係を係結かひりごといふ。

なむ。

人と争はざるなむ賢き。

花なむ美しき。

右の例のやうに、なむは物事を強く指示する意を表し、文の係詞となつてゐる。此の時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

こそ(こそ)

文語

それこそ大事なれ。

花こそ散りしか。

口語

それこそ大變だ

右の例のやうにこそは、ぞなむより一層強く物事を指示する意を表す。文語のこそは文の結に關係を及ぼし、下を活用する語の已然形で結ぶ。口語のこそは文の結には關係を及ぼさない。

こそ

や

や

おもしろき事ありや
かかる事ありやなしや
知るや知らずや

右の例のやは疑問の意味を表し、活用する語の終止形に續いたものである。

人やある。

花や咲きし。

物やかなしき。

右の例のやは疑問の意味を表すと同時に、文の係となつてゐる。この時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

悔ゆともかひあらむや
がくてやはあるべき。

か

か(か)

右の例のやは反語の意味を表してゐる。

文語

かかる事あるかなきか

いづれに賛成するか

落書したるは誰か

口語

どちらに賛成するか

落書したのは誰か

右の例のかは文の終に用ゐられ、文語でも口語でも體言又は活用する語の連體形に續いて、疑問の意を表してゐる。

文語

誰かある。

春と秋といづれかよき。

右の例のかは疑問の意味を表すと同時に文の係となつてゐる。この時、文は活用する語の連體形で結ぶ。

文語

今は何をか思はむ。

口語

今になつて何を思ふもんですか。

右の例のかは反語の意味を表してゐる。

だにすら

だにすら(さへ)

文語

鳥にだにしかず。

口語

鳥にさへ及ばない。

禽獸すら恩を知れり。

禽獸さへ恩を知つてゐる。

右の例のやうに、文語のだには大體軽い方を擧げて重い方を言外に思はせる意味を表し、文語のすらは大體一事をあげて他を類推させる意味を表してゐる。文語のだにすらに相應するところを口語では、さへの一語で表してゐる。

さへ

さへ(さへまで)

文語

口語

雨降り風さへ吹く。
涙をさへ落したり。

雨が降つて風さへまで吹く。
涙がさへまでながした。

右の例のやうに、さへは大體物事の上に更に或る物事の添ひ加はる意味を表してゐる。口語ではさへの外にまでを用ゐる。

かな

かな

見ぐるしき振舞かな

あゝ悲しいかな

右の例のやうにかなは感動の意味を表し、體言又は活用する語の連體形に續く。

よ

よ(よ)

文語

よき子よ。

口語

よい子よ。

右の例のやうによは餘情を添へて呼びかける意を表す。

練習

一次の文に誤があつたら、それを正し、且全文を口語に直しなさい。

又、活用のある語は活用させてみなさい。

イ 親の恩を忘るるな。

ロ 若し不都合の點あれば、遠慮なく指摘せらるべし。

ハ 昔の旅はさこそ不自由なりけむと思はる。

ニ 瀑の落ちる音百雷の鳴りはためくにぞ似たり。

ホ 三度登山しきが、常に天氣はよかりき。

ヘ 言はぬは言ふに優りてなむ覺ゆ。

ト 敵大勢なりとも退かず。

チ 仰ひて天に愧ぢず。

リ 風吹けば吹け、何の恐るる事かあるべき。

又 矢盡き刀折るとも退かじ。

ル 用意は整へり、彼だに來なば出發せむ。

ヲ 彼をや義人といふべし。

ワ 再び耳を傾けれど、何の物音もなかりき。

カ 磯松を今離れたる荒鷺の行方ゆくへに見える蝦夷えぞの遠山。

二次の表を作つてみなさい。

イ 動詞・形容詞の未然形に續く助詞。

ロ 動詞・形容詞の連用形に續く助詞。

ハ 動詞・形容詞の終止形に續く助詞。

ニ 動詞・形容詞の連體形に續く助詞。

ホ 動詞・形容詞の已然形に續く助詞。

第五章 語の構成と品詞の轉成

一 山々。 人々。 國々。 折々。 返すく。

ニ 夕日。 春雨。 物語る。 みぐるし。

合成語

疊語

熟語

右の例のやうに語が二つ以上重つて、文法上一つの語として扱はれるものを合成語といふ。

合成語には二種ある。一のやうに同じ語を重ねたものを疊語といひ、二のやうに異つた語が合成したものを熟語といふ。

イ 夜。す顔。を。笹。み雪。た易し。か細し。

ロ 我ら。法師ばら。春めく。才子ぶる。深み。遠さ。

右の例の傍線を施した語は、獨立しては用ゐられず、他の語に結びついて一語を成すものであるから接辭といふ。接辭には二種ある。イのやうに語の上に結びつくものを接頭辭、ロのやうに語の下に結びつくものを接尾辭といふ。

接辭

接頭辭

接尾辭

一 太郎に文法を教へたり。

二 先生の教へをよく守る。

右の例に於て一の教へは動詞であるが二の教へは名詞となつ

品詞の轉成

轉成の名詞

てゐる。このやうに、品詞が用法によつて他の品詞に轉ずることを品詞の轉成といふ。次に例を少しあげる。

轉成の名詞

一 動詞から轉成したもの。

笑。光。眺。謔。茂(人名)。勝(人名)

二 形容詞から轉成したもの。

鮭。燈。

厚み。深み。重さ。高さ。(これは形容詞の語幹に接尾辭

みさを添へたのである)

轉成の代名詞

轉成の代名詞

名詞から轉成したもの。

君。僕。殿。閣下。足下。

轉成の形容詞

轉成の形容詞

轉成の副詞

- 一 名詞から轉成したものの。
露けし。大人し。はなばなし。
- 二 動詞から轉成したものの。
めでたし。
- 三 副詞から轉成したものの。
甚だし。げにげにし。

轉成の副詞

- 一 名詞から轉成したものの。
つゆ知らず。ときどき雨降る。
- 二 動詞から轉成したものの。
たとへ雪になるとも……。
あまり勉強しすぎる。
- 三 形容詞から轉成したものの。

轉成の接續詞

花美しく咲く。
今日はよく晴れた。
朝早く出かける。

轉成の接續詞

- 一 名詞から轉成したものの。
都合あしく候間、缺席いたしたく候。
- 二 動詞から轉成したものの。
英語及びフランス語に通ず。

轉成の助動詞

轉成の助動詞

轉成の助動詞は皆動詞から轉成したものである。
給ふ。申す。奉る。

第六章 文の成分

文語

一 鳥 飛ぶ。

二 山 高し。

三 月 清し。

正成は 忠臣なり。

犬は 動物なり。

口語

鳥が 飛ぶ。

山が 高い。

月が 清い。

正成は 忠臣です。

犬は 動物だ。

主語

述語

主語の構成

右の例の一は「何が、どうする。」二は「何が、どんなである。」三は「何が、何である。」といふ形の文である。この「何が」に當るもの、即ち文の題目を表す語を主語といふ。○をつけた語がそれである。「どうする。」「どんなである。」「何である」に當るもの、即ち題目に就いて敘述を表す語を述語といふ。傍線を施した語がそれである。

主語の構成

述語の構成

文語

鳥 飛ぶ。

風 涼し。

月 清し。

我も 行かむ。

右の例のやうに、主語は體言が單獨に現れる場合と、下に助詞が添はつて現れる場合とある。

文語

言ふは易く、行ふは難し。

白きが美し。

右の例のやうに、主語が體言に準ずべき語からなることもある。

述語の構成

口語

鳥が 飛ぶ。

風が 涼しい。

月は 清い。

僕も 行かう。

口語

言ふのは易いが、行ふことはむつかしい。

白いのが美しい。

文語

一花 咲く。

山 高し。

二花 咲きたり。

月 清かりき。

右の例のやうに、述語は普通に用言からなり、又は用言に助動詞の添はつたものからなる。咲きたり、清かりきのやうに、異なつた品詞の連なつて成る語の活用するものを、活用連語といふ。

文語

彼は何人ぞ。

彼は音楽家なり。

(白きは花の流るるなり)

君君たり。

口語

花が 咲く。

山が 高い。

花が 咲いた。

月が よかつた。

口語

彼は何人か。

彼は音楽家です。

(白いのは花の流れるのだ。)

君は君だ。

活用連語

光陰矢の如し

(歲月は流るる(が)如し)

右の例のやうに、述語は體言と助詞との連語、體言と指定の助動詞なりたり、比況の助動詞如しとの連語から成ることがある。

文語

犬夜を守る。

太郎級長となる。

犬人にうたる。

補語

右の例で、「犬を守る」「太郎なる」というやうに主語と述語とだけでは、まともつた思想を表す事が出来ない。「夜を」「級長と」などの語が補はれて、始めてその意味が明瞭となる。かやうに述語の意味を補うて、文意を全うする語を補語といふ。補語は主として體言に助詞にを、とよりなどが結びついた連語

光陰は矢のやうだ。

(歲月は流れるやうだ。)

口語

犬が夜を守る。

太郎が級長となる。

犬が人にうたれる。

修飾語

形容詞的修飾語の構成

から成る。

文語

一白き花。咲く。
二山甚だ高し。

口語

白い花が咲く。
山が大變高い。

右の例に於て白きは花を修飾し甚だは高しを修飾してゐる。かやうに、文中にあつて他の語を修飾する語を修飾語といふ。一のやうに體言を修飾するものを形容詞的修飾語、二のやうに用言を修飾するものを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語の構成

文語

我が庭に古き松あり。
散る花を惜しむ。
健全なる精神は健全なる

口語

僕の庭に古い松がある。

副詞的修飾語の構成

右のやうに、形容詞的修飾語は主として形容詞・動詞の連體形又は活用連語の連體形若しくは體言に助詞のがの添はつた連語から成る。

文語

風いよいよ強し。
船遠く去る。
大河洋々として流る。

口語

風がますます烈しい。
兄は今朝東京へ出發した。

右の例のやうに、副詞的修飾語は副詞若しくは副詞に準ずる語から成つてゐる。

主語の併置

主語も述語も補語も修飾語も二つ以上重ねて用ゐられることがある。次にその例を示す。

主語の併置

文語

太郎次郎三郎はよく父母の教へを守る。
父も母も兄も弟も健全なり。

口語

梅も櫻も桃もひらく。
朝も晩も涼しい。

述語の併置

述語の併置

文語

太郎はよく勉めよく遊ぶ。
植物は發育し、生長し、繁殖し、枯死す。

口語

これは新しくて美しい。
彼は文學者で政治家である。

補語の併置

補語の併置

文語

先生、生徒に文法を教ふ。
彼は數學、國語、圖畫を好めり。

口語

太郎は犬にポチと名づけた。
友人は僕にたびたび手紙をくれた。

形容詞的修飾語の併置

形容詞的修飾語の併置

文語

大きく赤き椿咲く。
子たり弟たる道をつくせ。

口語

高くて峻しい山を登る。
魚のやうな獸のやうな動物。

副詞的修飾語の併置

副詞的修飾語の併置

文語

海青く黒く見ゆ。
椿の花大きく美しく咲く。

口語

簡単に明瞭に説明しなさい。
遠山の櫻は雲か霞のやうに見

獨立語

文語

文學を修め且つ武道を習

ふ。

あはれ、今年も暮れぬ。

少納言よ、香爐峰の雪はい

かならむ。

右の例の、且つそれに接續の言葉、あはれああ(感歎の言葉)少納言よ太田君(呼びかけの言葉)などは前に述べた文の成分(主語述語補語修飾語)からは獨立してゐる。かやうなものを一括して獨立語といふ。

口語

彼は學問が出来る、それに身體

も丈夫だ。

ああ花が咲いた。

太田君、あれを見たまへ。

える。

獨立語

中等國文典 初學年用 終

第一表

指 示 代 名 詞		
事	場	方
物	所	向
こ・これ これ (口) (文)	こ (口) (文)	こち こなた こつち こちら (口) (文) (口) (口)
そ・それ それ (口) (文)	そこ (口) (文)	そち そなた そつち そちら (口) (文) (口) (口)
か・かれ あ・あれ あれ (口) (文) (口) (文)	かしこ あそこ あそこ (口) (口) (口) (文)	あち あなた あなた あつち あちら (口) (文) (文) (口) (口)
いづれ なに どれ (口) (口) (口) (文)	いづこ いづく どこ (口) (文) (口) (文)	いづち いづかた どつち どちら (口) (文) (口) (口)

ガ行上二段
タ行上二段
ダ行上二段
ハ行上二段
バ行上二段
マ行上二段

過 朽 恥 強 延 夢

ち ち ち ち ち ち

ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ

ぐ づ つ づ ぶ ぶ

る る る る る る

れ れ れ れ れ れ

ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ

ガ行上一段
タ行上一段
ダ行上一段
ハ行上一段
バ行上一段
マ行上一段

過 朽 恥 強 延 夢

ち ち ち ち ち ち

ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ

る る る る る る

る る る る る る

れ れ れ れ れ れ

ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ ぎ

動詞活用一覽表

文語

口語

種		活		用		の		類		語		幹																						
ナ		カ		ア		ラ		ヤ		マ		ハ		タ		サ		ガ		カ														
行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段		行上二段														
(煮)		(着)		(射)		懲		報		夢		延		強		恥		朽		過														
に	き	い	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	き	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か											
に	き	い	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き											
に	き	い	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	り	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	く											
に	き	い	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	く											
に	き	い	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	け											
に	き	い	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け											
ナ	カ	ア	ラ	ヤ	マ	ハ	タ	サ	ガ	カ	ナ	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ	ナ	ラ	マ	バ	ハ	タ	サ	ガ	カ						
行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段	行上二段					
(煮)	(着)	(射)	懲	報	夢	延	強	恥	朽	過	生	死	有	去	讀	學	思	打	押	漕	行	種	活	用	の	類	語	幹						
に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	な	ら	ら	ま	ば	は	た	さ	が	か	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令
に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	に	り	り	み	び	ひ	ち	し	ぎ	き	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令
に	き	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令
に	き	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	る	る	む	ぶ	ふ	つ	す	ぐ	く	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令
に	き	い	る	ゆ	む	ぶ	ふ	づ	つ	ぐ	く	ぬ	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令
に	き	い	り	い	み	び	ひ	ち	ち	ぎ	き	ね	れ	れ	め	べ	へ	て	せ	げ	け	未然	語	連	用	終	止	連	體	已	然	尾	命	令

了 完		消 打		
たり	ぬつ	まじ	じす	しむ
たら	なて	まじく	〇す	しめ
たり	にて	まじく	〇ず	しめ
たり	ぬつ	まじ	じず	しむ
たる	ぬつる	まじき	〇ぬ	しむる
たれ	ぬつれ	まじけれ	〇ね	しむれ
〇ね	て	〇	〇〇	しめ
		まい	ないぬ	
		〇	〇〇	
		〇	なくず	
		まい	ないぬ	
		まい	ないぬ	
		〇	なけれ	
		〇	〇〇	

助動詞活用一覽表

時			消打	敬崇	役使	能可	身受	種類	文	語
來未	去過	了完								
む	きけり	りたりぬつ	まじす	しむすす	しむすす	べしるる	らるる			
○	○○	○たらなて	まじく○す	しめさせ	しめさせ	べくられ	られれ	未然		
○	○○	○たりにて	まじく○ず	しめさせ	しめさせ	べくられ	られれ	連用		
む	きけり	りたりぬつ	まじす	しむすす	しむすす	べしるる	らるる	終止		
む	しける	るたるぬつ	まじき○ぬ	しむすす	しむすす	べきるる	らるる	連體		
め	しか	○たれぬつ	まじき○ぬ	しむすす	しむすす	べけれ	らるる	已然		
○	○○	○たねて	○	しめさせ	しめさせ	○	られれ	命令		
よう		た	まいぬ	ます	させる	られる	られる			
○○		たら	○○○	ませ	させ	られれ	られれ	未然		
○○		たり	○なくず	まし	させ	られれ	られれ	連用		
よう		た	まいぬ	ます	させる	られる	られる	終止		
○○		た	まいぬ	ます	させる	られる	られる	連體		
○○		たら	○なけれ	ますれ	せれ	られれ	られれ	已然		
○○		○	○○○	ましませ	させ	○	られれ	命令		

助動詞活用一覽表

況比	歎咏	望希	定指	量推	時			消打	敬崇	役使	能可	身受	種類	
					來未	去過	了完							
ごとし	けりなり	たし	たりなり	けべしらしらむ	む	きけり	りたりぬつ	まじず	しむすするる	しむすす	べしるる	らるる		
ごたく	〇〇	たく	たらなら	〇べく〇〇〇	〇	〇〇	〇たなら	まじく〇ず	しめさせられ	しめさせ	べくられ	られ	未然	文
ごたく	〇〇	たく	たりなり	〇べくらしく〇〇	〇	〇〇	〇たりに	まじく〇ず	しめさせられ	しめさせ	べくられ	られ	連用	
ごとし	けりなり	たし	たりなり	けべしらしらむ	む	きけり	りたりぬつ	まじず	しむすするる	しむすす	べしるる	らるる	終止	語
ごとき	けるなる	たき	たるなる	けべきらしきらむ	む	しける	るたるぬつる	まじき〇ぬ	しむすするる	しむすす	べきるる	らるる	連體	
〇	けれなれ	たけれ	たれなれ	けべけれ〇らめ	め	しかけれ	〇たれぬつれ	まじけれ〇ぬ	しむすするる	しむすす	べけれ	られ	已然	
〇	〇〇	〇	たれ〇	〇〇〇〇〇	〇	〇〇	〇〇ぬて	〇〇〇	しめさせられ	しめさせ	〇〇〇	られ	命令	
		たい	ですだ	らしいよう	よう		た	まいぬ	ますられる	させる	られる	られる		
		〇	でせだ	〇〇〇	〇〇		たら	〇〇〇	ませられ	させ	られ	られ	未然	口
		たく	ででだつ	らしく〇〇	〇〇		たり	〇なくず	ましられ	させ	られ	られ	連用	
		たい	ですだ	らしいよう	よう		た	まいぬ	ますられる	させる	られる	られる	終止	語
		たい	〇〇	らしい	〇〇		た	まいぬ	ますられる	させる	られる	られる	連體	
		たけれ	〇〇	〇〇〇	〇〇		たら	〇なけれ	ますられ	させれ	られ	られ	已然	
		〇	〇〇	〇〇〇	〇〇		〇	〇〇〇	ませ〇〇	させ(む)	〇〇	られ(む)	命令	

口語

動詞助動詞連續一覽表

活用	未然形	連用形	終止形
四段活用	行か	行き	行く
上一段活用	着	着	着る
下一段活用	受け	受け	受ける
加行變格活用	來	來	來る
佐行變格活用	爲	爲	爲る
	せれる	たまた	まい
	よ [*] う	ない	(らし [*] い)
	ら [*] れる	ぬ	
	さ [*] せる		
	ま [*] い		

第五表

* (よう・まい・ないは佐行變格活用動詞の未然形
しの方に、られる・させる・ぬはせの方に接續する)

昭和六年八月十二日印刷
 昭和六年十一月二十四日發行
 昭和八年十月十七日訂正三版印刷
 昭和八年十月十日訂正三版發行

中等國文
 初學年用

定價 金四拾五錢



著作權所有



不許複製

著者 千田 憲

發行者 塚田 六彌

印刷者 西田 里司

印刷所 文勝社印刷所

發行所

東京市本郷區駒込千駄木町二七九番地

右文書院

電話 小石川 三七二三番
 振替口座東京 七四五二八番

大取次

東京 林平書店 · 大阪 柳原書店 · 名古屋 川瀬書店

大正

中華民國

興利

通

本



文
明
書
局
印
行

Library stamp and text area containing various characters and a circular seal.

Vertical text on the left side of the stamp area.

Small text block below the left vertical text.

Small vertical text block at the bottom left of the stamp area.



広島大学図書

2000022309

